

---

# 背負い

佳生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

背負い

### 【Zコード】

N5107A

### 【作者名】

佳生

### 【あらすじ】

人の為に命を失った青年と、少年の身体を借りて葬式に現れた謎の存在。不幸と自己犠牲。これは名もない青年と少年の物語。

(前書き)

輪郭があつません。説明よりも会話重視の小説となりました。

ああ、やつと見つけてくれたんだ。

ありがとう、かな？

……「めん、の方だよね。

嫌だなあ。

せっかく家に帰つてこれたのに、そんなに泣くものじやないよ。

僕は末っ子じやないか。

母さんも父さんも、姉さんも、そんなに泣くなよ。

本当にわづ、しじうがないな……。

「命が無くなるのは、それだけ人を不幸にするといつことだよ、お兄さん」

そうだね。

そうだ。

「望まれて生まれてきたから、なむせりうね」

うん。

ところで、君は誰？

お葬式にでも来たの？

「やうだよ。お兄さんのお葬式を見に来たんだけど……付け入る

隙もない

付け入る隙?

「この『じ』が、多いんだよね。世界での勤めを終えた人間に對して、敬意をはらわない葬式って。もし、ここもそんなんだつたら、お兄さんの躰、貰つていこうと思つてや」

「僕の躰つて、そんなにいいの? だつて、お腹に穴が開いてるよ?」

「何言つてるのさー とつても綺麗だよ。お兄さんはいい人だつたみたいだからねえ」

そんなことないさ。相手の嫌がることはしないよつにしてただけで…… でも、結局、殺されちゃつた訳だけ。

「殺されたのは、お兄さんがいい人過ぎたからだよ。躰が保たなくなるくら」

持ち上げられたモンだなあ…… 恥ずかしい。

「そうだなー、向こうの世界に行つたら神格もうえるよ。神様」

か…… つー?

「当たり前じやない。人に死くしたんだから」

あ、いや、それは困るー。  
いろいろ、本当に困るよー。僕は別に……！

「謙虚だよね、お兄さんはわあ」

そ、うかな？

「うん。…………と、お坊さんが来ちゃった。また後でね、お兄さん」

え、うん。

そう言った男の子は、喪服の中に溶け込んでゆく。  
名前がわからないけれど、どうやら親戚の子みたいだ。  
…………にしては、ずいぶんと大人びたこだつたなあ。

お坊さんの声が心に響く。心地いい感じだ。  
嫌いじゃない。

しくしく、て声が大きくなつてきた。

不幸、か。

うん。

不幸かもね。

母さんも父さんも姉さんも優しいから、きっと僕のこと忘れらんな  
いだらうな。

覚えててくれるのは嬉しいけど、その分だけ泣かれるのは困る。  
それだったら、覚えてくれてなくつていい。

嫌じやない？

自分のせいで人が泣くのって。  
僕は嫌なんだよね。

たまたま出会いって、助けてあげたはずの彼女達が、また泣いてるんだよ。

しかもごめんなさいとか言つてるし。

あなた達のせいじゃないよ、って母さんが泣きながら言つてる。

いまいち、説得力が無い。  
泣くなよなあ。

「お兄さんって、死んでからも氣苦労が絶えないんだねえ」

うーん?  
そうみたい。

「えつと、あそこのお姉さん達が、お兄さんに助けられた人?」

うん。

また泣かせちゃつた…………まいつたなあ。

「ふうーん。わかつた!」

え?

「ねえ、お姉さん達」

何をするつもりなんだろ?。

少年が「おれ」の兄さんが、泣いたらダメってゆつてるや～？」

バツー！

！？

いや、見すがだら、監して。  
まさにその場にいる全員が「いつ見てるよ。  
は……すかしいんだけ」。

「泣かれる為に、お兄さんは「おれ」の訳じやないよ」

そうだね。

……でも、その言葉は、よう一層の涙を誘つてゐるよ。  
ダメじやん。

それから程なくして、そこは宴会の場になつた。

ふだんはあまり飲まない父さんも、今日はがぶ飲みで、監とワイヤ  
いやつてる。母さんも姉さんも、いつもよつは、アルコールに手を  
付けていた。

明日は一日酔いだね。

「やうじやないかもよ？ 普段飲まなくても、飲める人だつたりす

るんだよねえ」

そうなんだ。

「ねえ、お兄さん」

なに？

「お兄ちゃんせわあ、ビーハして死んだの？ 本当はほんとじりで死んじゅうのは、おかしこと思つんだけど、  
ビーハして……て言われてもなあ。  
刺さつただけだし。

「へへん」

まさか、あんだけで死ぬなんて思わなかつたよ。  
女の子にあんな思いをせなくてよかつた。

「やつぱつ、お兄ちゃんつていうこう人なんだね」

馬鹿みたいだね。

「やんなことはないと思ひナビ」

そう言つてくれると、嬉しいな。

「ビーハいたしまつて～」

ほんやつとした会話のなかで、僕はあるじつを知つた。

君つてか、正体なんなの？

「し……正体？」

うん。

君つて凄そつだからさ。

「凄いって？」

僕と話せたり、そんな子供の格好してることとか。

「これは借りてるだけだよ。後でひきと返すつてこいつ約束で借りたの！」

へえ……そんなこともできるんだ。

だったら、僕に、全部背負わせる」とつてできるへ。

「背負いつつ？」

僕が、眞に背えた不幸を。

背負えたら、いなつて。幸せでせじょ。

「できる…………など、そんなことしたら、誰もお兄さんと悪い出でなくなつちやうよ？ それこそ、僕に何か差し出さなきゃ

差し出すの？

何でもいいよ。

僕は、誰かが不幸になるのが一番嫌なんだ。

たとえ、地獄に落とされようが、それよりも不幸が恐い。

「そつ……人の不幸を背負つといふことは、善くも悪くも、その人から感情を奪うことだよ？ 捧げるものは決してやすくはない。そつ、お兄さん自身とかかな」

僕自身？

「そつ。お兄さん自身。 脇も魂も。存在自体を差し出すこと

僕……自身か。

うん、いいよ。

「……」

君は、嫌なのかな？

「嫌じやないけど……お兄さんみたいな駆走は、滅多にないからね。でも……」

？

「ちょっともつといいかなって」

もつたいない？

「人間にしてもくはね

そなんだ？

「うふ。でも、こいよ。お兄さんはいい人だから、黙つて聞いて聞くよ」

うん。

ありがとうね。

「どういたしまして」

永遠の眠りつていうけど、僕は、本当に今後目を覚ますことはないだろう。

だって自分が重く沈んで消えてゆくのがわかる。

背負いこんで背負いこんで霧散しているのがわかる。一回死んでる身としては、あまり恐いとは思わなかつた。

ただ消えていく自分が、目の前にいるというだけで。特に、不満もない。

皆から、僕の与えた不幸を奪い返しただけだから。

そよなひ、幸せにさせよ。

もう、会つてほなうだうなう。

あのお兄さんは、疲れていたんだろうと思ひつ。

不幸を恐れる自分に。

幸せそうな周囲に。

不幸をあたえてはいけない幸福を奪つてはいけない。

その脅迫觀念が、きっと、お兄さんをあんなに綺麗に純粹に育て上げてしまつたんだろう。

美味しかつたけど、複雜だ。

こんなに美味しい人は、後数百年しても生まれないだろつ。

それだけ、純粹だつた。

磨きぬかれた鏡のよう、綺麗だつた。

「純粹で、綺麗なモノほど、生きにくく世界になつたんだね、ここ  
は」

ベッドの中で横になつて、小さくため息を吐いた。

「「」の身体、返すね。おやすみ」

もぞもぞと布団に潜り込み、少年は優しく囁いた。

目を閉じて数秒後子供部屋には、小さな寝息が響きはじめた。

誰も知らない、誰にも知られない、世界一臆病で優しい青年の背負つた物語は、こうして終わる。

誰かの満足なんて関係なく、最期の最後で、青年は我儘を通したのだった。

しかし、それすらも、知られることはなく、全ては平常の通りに、時間を刻む。

彼が望んだように…

(後書き)

読みでください、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5107a/>

---

背負い

2010年10月20日19時32分発行